

書評

スコット・ジェイムズ 著

『進化倫理学入門』

(児玉聡訳、名古屋大学出版会、2018年)

森 村 進*

はじめに

I 本書の梗概

II コメント——特に進化論的暴露論法について

はじめに

進化論は19世紀半ばから20世紀初頭にかけて倫理学に大きな影響を及ぼしたが、その後ムーアの「自然主義的誤謬」の指摘もあってか哲学者の関心は衰えた。ところがまた1975年のリチャード・ドーキンスのベストセラー『利己的な遺伝子』の刊行あたりから、急速に進化論、特に進化心理学は倫理学、広くは哲学一般に大きな影響を及ぼしている。人間の思考様式が進化の結果だという発想は、道徳のように見解の相違が大きくて真偽をたやすく証明しにくい領域では、その客観的な妥当性を掘り崩すようにも思われる。

ところが進化論と倫理学の関係に関する本格的な研究書は多くない。生物学者が倫理学に通じていないのに平気で道徳について語ることは珍しくないようだが、その反対に、進化生物学の知識を持つ哲学者が進化と倫理学の関係を論じた概説

『一橋法学』（一橋大学大学院法学研究科）第18巻第2号 2019年7月 ISSN 1347-0388

※ 一橋大学特任教授

書は内外を問わずごく少ない。本書（ジェイムズ 2018。以下かっこ内のページ数は、特に断らない限り本書のもの）はそのような数少ない書物である。なお著者のスコット・ジェイムズはノースキャロライナ大学哲学科の准教授で、本書の原書が現在まで唯一の著書である。

この書評は前半で本書の内容を簡単に紹介し、後半でその中でも私が関心を持った最後の部分についてコメントを加える。

I 本書の梗概

本書は序文を除くと、「第Ⅰ部 「利己的な遺伝子」から道徳的な存在へ——ダーウィン以後の道徳心理学」と「第Ⅱ部 「何である」から「何であるべきか」へ——ダーウィン以降の道徳哲学」という、比較的独立した二部に分かれている。

第Ⅰ部はまずダーウィン進化論の基本的な考え方を説明した後、社会生活を営む動物の「利他的」な行動や人間の道徳的判断や道徳的感情を、自然選択の理論によって説明してから、人間の道徳性がどの程度まで生得的かという問題に関する今日の心理学や脳神経科学の知見——それらは決してまだ決定的なものではない——を紹介する。その中で第4章「公正な報い」は、最後通牒ゲームや公共財ゲームといった行動経済学の実験を利用して、人々がしばしば自分の利益を犠牲にしても公正さを実現しようとするという現象と、それについての進化論的説明を紹介しているため、倫理学に関心を持つ読者には特に興味深く読めるだろう。

以上の第Ⅰ部はこれまでの進化心理学の知見がわかりやすくまとめられていて大変便利だった。（ただし「囚人のディレンマ」に関する記述など、もっと簡潔に書けなかったかと感じる部分もあった。）しかしそれだけなら、生物学者や科学ジャーナリストが書いた類書も少なくない。

本書独自の価値はむしろ以下の第Ⅱ部にある。この部分は進化から道徳を引き出すことができるかという、もっと純粋に哲学的問題を取り扱っているからだ。そのためこちらはもっと詳しく紹介しよう。

第6章「社会的調和」では、19世紀のハーバート・スペンサーの進化倫理学が批判的に検討されている。ダーウィンの進化論と違って、スペンサーの進化論

は目的という観念を持っていて、「進化している」と「正しい」とを同一視したというのである。(私の法哲学の恩師である故碧海純一先生は進化論に関心を持っていたが、よく〈生物進化の一番重要な点は、それが到達すべき目的や方向を持たず、突然変異と自然選択によって起きるといことなのに、通俗的には進歩や発展として説明され理解されている〉と不満を述べていたことを思い出す。碧海先生は「進化」という言葉を「進歩」の意味で評価的に用いる用語法に批判的だった。)

確かにスペンサーの進化の観念が今日の知見からは支持しがたいことは事実だろうが、彼が進化の方向と善とを同一視していたと理解するのはどうだろうか？むしろスペンサーは、進化は事実問題として、最大幸福という功利主義的観点から見て善い方向に向かっていると考えていただけだ、という解釈も可能だろう。特に『人間対国家』を書いたころの後期のスペンサーは、社会が進歩しているかについて悲観的になっていた(森村 2017: 443-4 を見よ)。

続く第7章「ヒュームの法則」と第8章「ムーアの自然主義的誤謬」と第9章「ムーアとヒュームを再考する」は一緒に紹介しよう。〈「である」という事実の言明だけから「べし」という規範の言明を導出することはできない〉というのが「ヒュームの法則」で、〈善さ〉という価値的性質と、たとえば「人が欲求すること」といった自然的性質とは同一でない〉というのが「ムーアの自然主義的誤謬」の指摘だ。この二つの主張は厳密には別物だが(そして著者は、ムーアの議論は成功していない一方でヒュームの法則は妥当だと考えるが)、いずれも進化論から道徳的意味を直接引き出そうとする試みへの反論になる。著者はスペンサーや現代の科学者や哲学者によるそのような試みをいくつか検討して、いずれも失敗していると判断して、ヒュームの法則は乗り越えられていないとする。

このあたりは以前から倫理学の文献でよく論じられてきた部分だが、私は本書で紹介されているジェイムズ・レイチェルズによる「人間の尊厳」観念批判(第9章5)は知らなかった。ただし訳者の児玉聡は著者のレイチェルズ解釈に「若干疑問が残る」(302 ページ)と異を唱えている。

以下、本書の最後の三章は、進化論が道徳心理や社会道徳の現象を説明できるとしたらそのことは道徳の実在性あるいは客観性という問題について何を含意す

るかというメタ倫理学的問題を詳細に検討している。

まず第10章「進化論的反実在論——初期の試み」によると、社会生物学者のE・O・ウィルソンと生物学の哲学者であるマイケル・ルースは、スペンサーと反対に、人間の道徳的信念は進化論によって因果的に説明できるからこそ、道徳の客観性の主張は破壊されると考えて、道徳の非実在論を提唱した。人間道徳に関する進化論を採用すれば、世界の中に道徳的な事実が存在すると考える必要はないというのだ。訳者はこの説とジョン・マッキーの「錯誤説 error theory」との類似を指摘する(304ページ)。

第11章「最近の進化論的反実在論」ではもっと最近の反実在論者として、リチャード・ジョイスとシャロン・ストリートの議論が紹介される。ジョイスは「自然選択が道徳判断に関して想定していた機能は、**世界の特徴を検知すること**とはかけ離れたものであり、むしろ**優れた社会的行動を奨励することに近い**」(254ページ。ジョイスからの引用。強調は原文)と述べた。われわれの道徳的信念をひき起こしたものはそれに対応する「道徳的事実」なるものではなく、進化のプロセスだというのだ。またストリートは同じような結論に至る「ダーウィン主義のジレンマ」という次のような議論を提出した。——進化論を前提とすると、道徳的評価から独立した道徳的真理と道徳心の進化との間の関係について、道徳実在論者は両者間の関係を否定してしまうか、さもなければ両者の間に「適応的關係」があると考えるかしかない。前者の選択肢を取ると、進化の力が道徳的判断を真理の方に向かわせた想定すべき理由は何もないことになるので、われわれの道徳的信念はほとんどが誤りだろうという帰結に至ってしまう。かといって後者の選択肢を取ると、道徳的判断は「それらが独立の評価的真理の知覚であったからではなく、むしろそれらがわれわれの祖先の環境とその環境に対する彼らの反応との間に適応的な関係を形成したために」(259ページ。ストリートからの引用)進化してきたにすぎない。「道徳的真理」という概念は、この「適応的關係説」の中で何の説明力もはたさない余計物である——。後者はジョイスの説に似ているが、こう考えるならば道徳的な真理という観念が果たす役割はなくなる。道徳実在論にとってはいずれの選択肢も取りがたい。

この二人の説、特にストリートの議論は今日の英語のメタ倫理学文献でしばし

ば言及されているが日本語文献ではほとんど紹介されていないだけに、本章はその点でも有益だ。もっともジョイスもストリートも道德の反实在論者だが、それだけでなく、ジョイスは「改革的道德フィクションリズム revolutionary moral fictionalism」を、ストリートは「構築主義 constructivism」をそれぞれ提唱して、道德の実践の価値を認めているのだが、本書ではそこまでは書かれていない。

本書の最終章であり第二部の中で最長でもある第12章「進化論的实在論者がとりうる選択肢」は、これまでの章で紹介された議論に対抗して道德实在論を擁護するさまざまな試みを四つのタイプに分類する。本章の節の見出しを引用してそれらを紹介すると、第一に「選択肢1——正・不正の学習」は、われわれの道德感覚が進化の産物であることを否定するものだ。だがこの立場は進化論的实在論者が行ってきた実証的な主張を完全に否定しなければならないだけに取りにくい。

次の「選択肢2——反応依存性」は哲学者ジェシー・プリンツが説く説だ。プリンツによれば、道德的属性は「正常な条件下で主体に典型的な仕方では反応させるように傾向づける」(264) という意味で実在する。たとえば「不正である」という性質は、「おかしい」とか「おいしい」といった性質と同じような反応依存的性質だということになる。著者によれば、文化によって情動的反応は異なりうるから、この説は（ある意味で）道德的实在論を斥けるが、道德的相对主義を受け入れていることになる。

第三に、「選択肢3——自然化された徳倫理学」はアリストテレス的な徳倫理学のものだが、アリストテレスの古い目的論的自然観から離れて、むしろ自然選択によって生じた人間に固有の機能が道德の内容を決定すると考える。著者はこのような新アリストテレス主義者として、ウィリアム・ケースビアとフィリップ・キッチャーをあげる。

最後の「選択肢4——道德的構成主義」は著者自身が支持するものだ。それは2つの部分に分かれていて、片方のメタ倫理的な部分は、「道德的な正・不正は、振舞いを統御するための規則として（特殊な見地から）行為者が受け入れるであろうものから成り立っている」(264) というものであり、他方の道德の起源に関する部分は、「我々が道德判断を下すように進化した理由は、こうした圧倒的多

数の判断が真であったという事実と厳密に関連している」(265。強調は原文) というものだ。前者は「ある人の行為に対して他者がどのように反応するかに関する事実が道徳的な事実や真理それ自体を構成する」(286)とする「道徳的構成主義」の一種であって、これは反実仮想に依存するから、少なくともいくつかの真理は精神から独立に存在することになり、道徳の客観性と両立する——。しかし道徳的事実のこの程度の存在を主張するからといってそれを道徳の「實在論」と呼ぶべきかを疑う人もいるだろうが、これは用語の問題だ。また道徳の起源に関する後者の主張は、いくつかの文化横断的な規範の存在によって裏打ちされる。

しかし第12章の後半はこれらの選択肢に対するリチャード・ジョイスの批判を紹介している。ジョイスは選択肢2(反応依存説)と4(道徳的構成主義)を「同じ哲学的立場としてひとまとめにし」(288)て、次の三つの問題を指摘した。その第一は「判断者あるいは観察者が反応する際の状況の特定化にかかわる不完全性」(288)の問題で、いかなる人の反応や判断が基準になるかが決まらない、というものだ。第二は「実践的重要性の問題」で、「適切な状況下にある誰か」の判断がなぜこの私にとっての動機づけを与えるのか明確でない、というものだ。そして第三に、選択肢2や4による道徳判断は常識的な道徳感覚と一致するだろうかという「内容の問題」がある。それらの選択肢によって不正だと認識される行為が常識的に不正だとされる行為とは限らない、というのだ。次に選択肢3(自然化された徳)に対するジョイスの批判は、生物学的な機能は道徳的な規範性まで与えない、というものだ。心臓には血を送りだす機能があるからといって、心臓には血を送りだすべき義務があるということにはならない。

著者は進化が人間の道徳判断を形成したのか、またそうだとしたらどのような仕方でしてきたのかという第Ⅰ部の問題も、道徳の進化論的探究が道徳の内容や實在について何を言えるかという第Ⅱ部の問題も、ともに研究中の問題であることを述べて本書を締めくくる。

私はこの訳書を原書と対照して読んだわけではないが、兎玉聡による訳文は読みやすく、訳者解説も簡にして要を得ているから、訳書として理想的な出来栄えだと言えよう。そして「進化論と倫理」という問題の現状について、少なくとも日本語では類書が全く存在しないだけに、この訳書が刊行された意義は大きい。

ただし本書には物足りなさを感じさせるところもある。原書が出版されたのが2011年であるために、この書評の末尾の参考文献にあげるカーネマン、グリーン、ハイト、ピンカー、リドレーの書物など、直接あるいは間接に進化心理学に関係する2010年代の重要な書物が参照されていないことが惜まれる。それらの本はそれぞれの仕方、本書第Ⅱ部の内容に関係するものだからだ。たとえばカーネマンやグリーンやハイトの心理学の本は、われわれの道徳的判断の多くが合理性のない原因によって影響されているということをおおむね実証的に示して、「進化論的暴露論法 evolutionary debunking argument」を支持するために利用できそうなデータを与えている一方、ピンカーとリドレーの本からは、進化が道徳に対して示唆できる可能性についてもっと楽観的であるべき理由を引き出せるように思えるからだ。なお著者が倫理学の大百科事典に寄稿した「倫理学と進化」(James 2013)という項目は、本書以降発表されたもので本書の内容の要約として読むことができるが、そこでもそれらの文献は挙げられていない。

Ⅱ コメント——特に進化論的暴露論法について

私は本書第10-12章で取り上げられた問題について以下でもう少し考えてみたい。進化論と倫理の関係について、著者が紹介する見解の他にも検討に値する説はいくつもあるのではないかと思うからだ。なお進化論的暴露論法は本書刊行以後メタ倫理学の世界で賛否両論とも一層活発に論じられているが(たとえば、Enoch 2011: ch. 7; Parfit 2011: secs. 117-119; Parfit 2017: secs. 160-163; Tiberius 2015: 19-22; Ruse and Richards 2017 に収録された論文の多く; Schechter 2018; Lutz and Ross 2018; Cuneo 2018. また最近出たばかりの『倫理学における暴露論法』(Sauer 2018)という本は、進化論的暴露論法に限らず暴露論法一般の検討を行っている。日本語文献はまだ少ないが、蝶名林 2016 : 8.2 が批判的に、小川 2019 : 第Ⅲ節が肯定的に検討している)、私はそれらの文献の多くを拾い読みしかしていないことをお断りする。ただその拾い読みから得た印象では、今日では著者ジェームズが「選択肢4」としてあげた構成主義の見解を取る論者が多いようだ。

進化論と道徳の実在性や客観性に関する諸説について、著者と違ったもっと体系的な分類をしてみよう。それは（進化論による道徳現象の説明が、完全ではないにせよある程度成功しているということを前提として）

- ①進化論は道徳の非実在論を支持するという説と、
- ②進化論は非実在論と実在論の対立についてはどちらも支持せず中立的でありうるという説と、
- ③暴露論法とは反対に、進化論はむしろ道徳の妥当性を支持するという説への三分法だ。これによると、著者のいう進化論的非実在論は①に属し、それに対する実在論の選択肢（本書第12章）の2と3は③に属し、選択肢4の中のメタ倫理的構成主義の部分は②に親しみやすく、道徳の起源に関する部分は③に属する、ということになりそうだ。それぞれの説を説明してみよう。

まず①の非実在論は、暴露論法を行う論者の多くがとる議論だ。これについては本書の第10-11章で紹介されている通りだから、それ以上の説明を省略して、ジョイスとストリートはこの説を今でも頑強に提唱しているということだけつけ加えておく。

次に、進化論は道徳の実在・非実在という問題について中立的でありうるという②の見解は、暴露論法の批判者の多くが採用しているものだ。その中には、〈この議論によれば数学や論理学の命題の真理性さえも否定されてしまうはずだが、論者は数学と倫理の相違を説明していない〉（Clark-Doane 2017. また Parfit 2011: sec. 117 も参照。認識的理由の妥当性について同じような議論をするものとして Vavova 2017）とか、〈道徳規範の正しさは進化論によって否定されない。それは『多くの単なる日常的な道徳判断と違って、われわれがいくら冷静に反省して検討してもそう考えざるをえない』ということによって正当化される〉（Parfit 2011: sec. 118 を参照。また本書 270 ページ最初と 302 ページも見よ）といったものがある。

この立場をとる論者の多くは、人々が現実を持っている信念や判断の中には直接進化によって説明することができず、むしろその内在的な妥当性によって説明されるべきものがあると考え。確かに人類が共通に持っている性質の多くは進化の産物だろうし、その中にはある種の道徳判断が含まれるかもしれないが、あ

らゆる性質が進化で説明できるわけでもない。たとえば人間が一般的に理性的能力を持っているというのはその生存に役立つきただろうが、その能力の行使のすべてが生存に役立つわけでもないだろう。たとえば実用的でない理論や芸術がそうだ。これらの活動は理性的能力がなければ存在しなかっただろうが、だからといってその内容がすべて生存に役立つわけではなく、その多くは生存（種の生存にせよ、遺伝子の生存にせよ、個体の生存にせよ、集団の生存にせよ）の観点から見れば無用の長物、それどころか積極的に有害でさえあるかもしれない。（そしてまた多くの動物は、理性的能力を全然持たずにも立派に生き残ってきた。）事実問題としてわれわれの実践的・道徳的信念の多くは自然選択では説明できない。その一方、集団の生存に役立つから自然選択されてもよさそうな実践的信念がその不道徳性のゆえに淘汰されてきたといった反論も提出できる。

進化心理学を受け入れるからといって、人々の道徳感情の中には進化で説明できないものがあると主張するのは全然おかしいことではない。要するに、進化はわれわれの道徳心を部分的にしか説明できないのだ（Parfit 2011: sec. 119; Cuneo 2018 を参照）。進化論的暴露論者の多くは、進化論はあらゆる道徳判断の生成に適用されるか、それとも全然適用されないかのいずれだ——そして後者の態度は非科学的だ——と想定しているようだが、そのようなオールオアナッシングの二者択一は必要がない。

しかしだからといって、進化論が道徳について何も言えないわけではない。②の見解を取る場合でも、人々の現実の道徳的判断の中にはその内在的な正しさでなく自然選択によって説明されるべきものがあるとして、暴露論法を利用して日常道徳の部分的破棄を唱えることができる。たとえばグリーン（2015）やラザリ＝ラデクとシンガー（2018: 37-47）は、われわれが持っている道徳的信念の中で、快樂は善であり苦痛は悪であるとか、世界全体の中で福利が可能な限り最大になることが望ましいといった功利主義の信念は進化論的に説明できないが、それと衝突するさまざまな伝統的道徳の信念や義務論的信念は進化論的に生じたものだから不合理だとして功利主義を擁護した。

グリーンらのこの議論がどのくらい成功しているかどうかは疑問がある。第一に、これらの論者は、非功利主義な信念——たとえば、常に約束を守れとか、作

為による殺人の方が不作為によって人を死なせることよりも一層不正だといったもの——が内容の正しさではなく進化的な適合性のゆえに自然選択されたが功利主義的な信念はそうでない想定しているが、その想定を裏付けるような証拠は部分的にしか与えられない。〈今から見れば不合理なさまざまな道徳的信念も、遺伝子が生き残るために適当だったから自然選択された〉という主張は単なる「お話」ではなく、なぜそのような信念が生存に適していたかの具体的な説明とともに主張されるべきだ。(私はそのような説明がありえないと言っているのではない。そのような説明を与えやすい信念もあれば、与えにくい信念もあるだろう。) 同じように、功利主義が自然選択されないという主張も疑問だ。特に功利主義の中の「快樂は善であり苦痛は悪だ」という信念はかなり個体の生存に役立つそうではないか。私はグリーンたちに対して「あなた方は功利主義道徳の進化的適応度を過小評価しているのではないか」と言いたい。

第二に、ある信念が〈生存に役立たない〉からといって、客観的に正しいとか妥当だということにもならないはずだ。ある種の信念はそれを持つ個人にとっても社会全体にとっても不利益であっても——つまり生存に適しなくても——、それを有利に利用できる人々によって押し付けられているのかもしれない。

しかし暴露論法が妥当な場合も確かにあるだろう。それは、人々が当該の道徳判断について与える理由がアドホックなこじつけにすぎない場合や、無意識のうちに不合理な推論に基づくものや、冷静な反省に耐えないような場合や、信念の内容が道徳とは無縁の原因(たとえばその時の天気や健康状態)によって変化を受けるような場合だ。そういった場合、暴露論法は人々がそのような信念を持っているという事実を正当化せず説明する(そしてそのような信念から解放することができる)ことができるだろう。特に、功利主義に反する道徳的信念の中にはそのような蒙昧主義的なものも少なくないだろうと認める程度まで、私はグリーンたちに賛成できる。しかし反功利主義的な道徳判断のすべてが暴露論法の対象としてふさわしいとは思わない(グリーンの理論に関する他の観点からの検討として、Sripada 2018も参考になる)。

進化論はむしろ道徳の合理性を支持するという③の見解は、さらに道徳非实在論からのものと实在論からのものに二分できよう。

道徳非実在論からはたとえば、〈道徳が実在しなくても、あるいは道徳について真偽を語れないとしても、道徳が人々にとって有用性を持っている以上、道徳判断についてその妥当性を語れるから、われわれは道徳的真理なるものを想定しなくても道徳的判断の是非について語り、論ずることができるし、またそうすべきだ。そして自然選択——というよりも、むしろ自然な社会選択——によって生き残ってきた道徳規範は実際に人々の役に立つ蓋然性が大きい〉という主張ができよう。このうち前半の主張は道徳フィクショナリズムだが、後半の主張は「ハイエク的」とも呼べるある種の社会進化論あるいは一般的進化論（ハイエク自身の進化論に関する専門的研究として最近 Beck 2018 が出た）であって、メタ倫理学上は何らかのタイプの道徳実在論と結びつけることもできる。後者の社会進化論は、人類の歴史は巨視的に見れば施政者による計画よりも諸個人の自由な行動による自生的な秩序の進化のおかげで進歩改善を遂げてきたというもので、19世紀ではスペンサーが、今日ではピンカー（2015）やリドレイ（2016）が提唱するものだ。（人権思想について、内藤 2007 も同様か。なおこれらの主張は「歴史の発展方向」が必然的・分析的に価値を持っているとするものではない。それは単なる事実から価値を導き出しているのではない。何らかの価値判断を前提として進化の結果を肯定的に評価しているのだ。）

道徳実在論の立場からは、ちょうど人類の生存がさまざまな経験的な事実や論理的・数学的な真理に反応することで維持されてきたのと同じように、道徳的な真理への反応によっても維持されてきたと考えれば、進化論はむしろ道徳的真理の実在を支持する論拠になる、という議論も可能だろう。人々が持ってきた無数の信念の中には虚偽のものもたくさんあったが、たいていの場合は真だったからこそ、これまで人類は主として繁栄してきた、というわけだ。人類が生存してきたことはおおむね善いことだったという、多くの人々が賛成するであろう判断を前提とすると、進化と道徳的判断の正しさをこのように結びつけることができる（Enoch 2011: ch. 7 はこのような発想に近いと理解できよう）。

ただし以上の議論に対しては、それが立証しているのは道徳判断の有益さにすぎず、判断の真理性ではない、という批判が考えられる。虚偽の判断や信念の中にも人類の生存に役立ってきたものは多いだろう。さらに、経験的事実や論理的

関係に関する判断ならば、それが真理だということと有益だということは（無関係だとは言えないが）区別して考えられるが、今紹介した議論の場合、道徳的判断が有益だということと区別して、いかなる意味で真だということになるのかがそもそも明らかでない。

ここまで暴露論法に対するいくつかの反論を考えてみたわけだが、それらについても本書の末尾で紹介されたジョイスの批判は必要な変更を加えればあてはまりそうだから（「自然化された徳」に対する批判は別）、それに対する可能な返答を示唆してみたい。

ジョイスがあげる第一の「判断者あるいは観察者が反応する際の状況の特定化にかかわる不完全性」の問題については、なるべく不偏的かつ合理的で、重要な事柄についての知識を持つ人の判断が基準とされるべきだ、としか言えそうもない。第二の「実践の重要性の問題」については、これは道徳の動機づけに関する内在主義を取るならば問題だが、道徳は必ずしも誰にとっても動機づけの力を持つとは限らないと考えて外在主義をとれば問題にならない、と答えられよう。そして第三に、論者が擁護しようとする道徳判断は常識的な道徳感覚と一致するだろうかという「内容の問題」については、両者が一致しないとしたら、それは常識道徳にとっての問題なのであって、正当なものとして提唱されている道徳にとっては問題でない、とはねつけることも可能だろう。

ただしこれらの返答は決して決定的なものではないし、多くの人を納得させるものでもないかもしれない。進化論と道徳との関係については、経験的にも純理論的にもこれから研究を進めるべき問題がたくさん存在する。その研究は前世紀における長い衰退の後でようやく最近再興し始めたばかりだ。

参考文献

- 小川亮（2019）「どこまでも主観的な解釈の方法論」『法と哲学 第5号』（信山社）
ダニエル・カーネマン（2012）（原書2011年）『ファスト&スロー』（全二冊、村井章子訳、早川書房）
ジョシュア・グリーン（2015）（原書2013年）『モラル・トライブズ』（全二冊、竹田円訳、岩波書店）

- スコット・ジェイムズ (2018) 『進化倫理学入門』(児玉聡訳、名古屋大学出版会)
 (原書は Scott M. James, *An Introduction to Evolutionary Ethics*, Wiley-Blackwell, 2011)
- 蝶名林亮 (2016) 『倫理学は科学になれるのか』(勁草書房)
- 内藤淳 (2007) 『自然主義の人権論』(勁草書房)
- ジョナサン・ハイト (2014) (原書 2012 年) 『社会はなぜ左と右にわかれるのか』(高橋洋訳、紀伊国屋書店)
- スティーヴン・ピンカー (2015) (原書 2011 年) 『暴力の人類史』(全二冊、幾島幸子 = 塩原通緒訳、青土社)
- カタジナ・デ・ラザリ = ラデク、ピーター・シンガー (2018) (原書 2017 年) 『功利主義とは何か』(森村進 = 森村たまき訳、岩波書店)
- マット・リドレー (2016) (原書 2015 年) 『進化は万能である』(太田直子ほか訳、早川書房)
- Beck, Naomi (2018), *Hayek and the Evolution of Capitalism*, The University of Chicago Press.
- Clark-Doane, Justin (2017), “Debunking Arguments: Mathematics, Logic, and Modal Security” in Ruse and Richards (2017).
- Cuneo, Terence (2018), “The Evolutionary Challenge to Knowing Moral Reasons”, in Daniel Star (ed.), *The Oxford Handbook of Reasons and Normativity*, Oxford University Press.
- Enoch, David (2011), *Taking Morality Seriously: A Defense of Robust Realism*, Oxford University Press.
- James, Scott M. (2013), “Evolution, Ethics and”, in *The International Encyclopedia of Ethics*, Wiley-Blackwell.
- Lutz, Matt and Ross, Jacob (2018), “Moral Skepticism”, in McPherson and Plunkett (2018).
- McPherson, Tristram and David Plunkett (eds.) (2018) *The Routledge Handbook of Metaethics*, Routledge.
- Parfit, Derek (2011), *On What Matters*, Vol. 2, Oxford University Press.
- Parfit, Derek (2017), *On What Matters*, Vol. 3, Oxford University Press.
- Ruse, Michael and Robert J. Richards (eds.) (2017), *The Cambridge Handbook of Evolutionary Ethics*, Cambridge University Press.
- Sauer, Hanno (2018), *Debunking Arguments in Ethics*, Cambridge University Press.

Schechter, Joshua (2018), "Explanatory Challenges in Metaethics", in McPherson and Plunkett (2018).

Sripada, Chandra (2018), "Experimental Philosophy and Moral Theory", in McPherson and Plunkett (2018).

Tiberius, Valerie (2015), *Moral Psychology*, Routledge.

Vavova, Katia (2017), "Debunking Evolutionary Debunking", in Steven M. Cahn and Andrew T. Forcehimes (eds.), *Foundations of Moral Philosophy: Readings in Metaethics*, Oxford University Press.